

ザ・エンターテインメント 1983



日本文芸家協会編

ザ・エンターテインメント

1983

日本文芸家協会編





ザ・エンターテインメント 1983

1983年5月30日 初版発行

編纂者 日本文芸家協会

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話 03 (265) 7111 (大代表) 〒102

振替東京 3-195208

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

Printed in Japan 0093-872358-0946(0)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ザ・エンターテインメント 1983

初心と原点

黒岩 重吾

私事にわたって恐縮だが、私は昭和五十年代に入ってから、古代を舞台にした歴史小説を書くようになった。今では、現代小説と歴史小説の比率は半々といったところである。

ただ、かつての私の読者の中には、歴史小説で余りエネルギーを消耗せず、昔のような小説を書き続けて欲しい、と手紙をくれる人も居る。その気持は私にもよく分る。だが手紙の主は大切な点で、作家を誤解している。私は古代史の歴史小説を書いても、少しもエネルギーを消耗していないのである。反対に創作意欲が旺盛になっているのだ。

最近、中間小説の衰弱が云々されているが、作家にとって一番大切なのは、絶えず創作意欲を沸騰させることであらう。

新人時代は無我夢中だが、長い年月、小説を書き続けていると、どうしても創作意欲が減退する。

ことに現代は、小説以外の昂奮剤が人間社会に氾濫している。かつての私達は、未知への憧れや精神的な欲求不満を、読書に求めた。だが今では、街に出ると、書店に行くまでに、人間の精神を侵蝕

する昂奮劑や刺戟劑を無意識のうちに注射される。未知への憧れは刺戟劑によって分裂し、精神的な欲求不満は、昂奮劑によって拡散してしまふ。

書店に辿りついてみると、原色の氾濫である。特定の書物なり雑誌を購入する目的で書店に入った客以外は、無意味に書店内をうろつき、習慣的に置かれた本や雑誌の頁をめくる。私はこのまえがきを書くため、某書店に入り、客達を観察した結果、少なくとも半数近い人達が、何を讀みたいか、という目的もなく、書店に来ていることに氣付いたのだった。これは私の錯覚かもしれないが、そういう人達の表情は何となく街を歩いている人々と同じなのである。活字を求めて入って来た人達とは到底思えないのだ。この某書店の光景を見ても、現代の作家が如何に困難な状況下に置かれているかが理解出来よう。

ことに今のように小説雑誌が多くなり、少し脚光を浴びると注文が殺到するような状態では、折角世に出た作家も、あつという間に重荷を背負つた駄馬になり兼ねない。

だが、こういう状態が現実である以上、最早作家は、雑踏の中を歩いているような書店の客を意識する必要はない。初心に戻り、何故自分が小説を書き出したか、という原点を確認すべきであろう。そこから創作意欲が沸騰し、信念の持てる仕事が出来るのである。

そういう意味でも、ここに集められた諸作品が、それぞれの作家の信念の所産であることだけは間違いない。

目次

まえがき 初心と原点

犬の眼

あの旗の下に

みのむしの糸

ホテルでシャワーを

金欄抄
きんらんしょう

黄金の腕

影 絵

陽と影の女
ひかげのおんな

白鳥と拳銃

柴股帝釈天
しばまたいしゃてん

F.F
Fさま

スナップショット

枯葉のダキメ

死者の見た夢

黒岩 重吾 三

栗本 薫 九

高橋 揆一郎 元

野坂 昭如 兎

山田 正紀 兎

赤江 瀑 三

阿佐田 哲也 九

阿刀田 高 一〇

黒岩 重吾 二三

田中 小実昌 一元

藤本 義一 一五

古井 由吉 一七

池田 満寿夫 一七

陳 舜臣 一五

源氏 鶏太 二五

濁流の魚

面火^{おもひ}

素顔の時間

かんちがい閉口坊^{へいこうば}

満ち足りた生活

姥ときめき

塔

仮面のシルビア

遺言

真実の焼うどん

黒塚^{くろづか}

二人のランナー

涙ながして、また夜

あとがき

夏樹静子 三三

西村望 二五

眉村卓 二五

かんべむさし 二九

佐野洋 三五

田辺聖子 三五

樹下太郎 二九

都筑道夫 二五

堀晃 二七

椎名誠 二九

村松友視 二七

海老沢泰久 二五

藤原審爾 二九

権田萬治 四三

犬の眼 栗本 薫



作者のことは 栗本 薫

この作品は、昭和五十七年一月号から一年間、小説新潮誌上に連載した「栗本薫バラエティ劇場」の第一回分として書いた。

この「バラエティ劇場」は、推理にはじまり、SF、時代、風俗、などとなるべく十二の異ったジャンルを書きわけるといふつもりで書いて、作者にとっては、たいへん面白い飽きのこない連載でよかった。

「犬の眼」は、作者のつもりでは、一応推理小説である。

しかし、「本格推理」としては半年後に「ガンクラブ・チェックを着た男」という名探偵ものを書いたし、「風俗推理」も別にあるので、正確にいうとするならば、「社会推理」ものとか、「心理ミステリー」というのであろう。

たしか、雑誌掲載時のアオリ文句でも、編集者氏がかなり苦心して、やはりそういったことばをつけた。まあミステリーを無理に分類しようという方がおかしいのである。

昭和二十八年二月十三日 東京生れ

「ぼくらの時代」にて第二十四回江戸川乱歩賞受賞

「絃の聖域」にて第二回吉川英治文学賞受賞

主著―「文学の輪郭」

人間は、誰しも、幸福なときには、自分がどれほどたくさん大切なものをもっているのかわからぬものである。時には、何が大切で、何がまさに自分の幸福をつくっているのかさえ、気づかぬときがある。

能勢正明がそのような愚にもつかぬくりごとを考えるのは、この一週間で、すでに何百回目だか知れなかった。しかし、その作文が、俊夫の机のひき出しから出てきたとき、またしても彼は涙にぐれながらそのようなことを考えずにはいられたかった。

それは、「ぼくのいぬ」と題された、短い作文で、赤鉛筆で90点がついていた。俊夫は、正明と有紀子とどちらに似たのか、小学校二年にしてはまったく作文がうまかった。

「ぼくのいぬ」

そっと、正明は、有紀子にきこえぬところで、声に出してわが子の作文を読みはじめた。それは子供供した、大きな字でかっきりと書かれていた。一字一字、鉛筆の尻をかみながら、まじめくさって書いている、力んだ顔が、目にかんた。

「ぼくのいぬは たろうといひます。大きくてちゃ色をしています。たろうはざっしゅでとてもおりこうです。ぼくが雨のひに がっこうのちかくで ひろってきたから ぼ

くのいぬになりました。

たろうは おおきなこえで よくほえます。それで おかあさんやぼくは うちのなかにいても おきやくさんがきたことを すぐわかります。

たろうは いつも おかあさんが おさんぽをさせます。でも日ようびには おとうさんが ちかくの どてへつれてゆきます。たろうはよろこんで すごいちからでかけるので おとうさんはころびそうになります。

ぼくは たろうがだいすきです。たろうもぼくにいちばんよく なついています。そのつぎが おとうさんで さいごが おかあさんです。どうしてかとゆうと おかあさんはほんとはいぬが きらいだからです。でもたろうをかってから すきになったとゆいました。たろうが いつまでも ながいきしてほしいです。

二ねん三くみ のせとしお

「ゆう」というところを二ヶ所、「いう」と赤で直されているだけで、あとは、大きな二重丸が点数の下につけられているその作文を、読んでいるうちに、もう一週間もたったというのにどうしても馴れることのできぬ涙がせきあげてきた。

（たろうが いつまでも ながいきしてほしいです）

不幸な子供、何というはかない望み！

（太郎も死んでしまった。おまけに、おまえまで……）

太郎が、車にはねられて死んだときの、俊夫の身も世もない嘆きようを、正明は思い出した。

あのときには、まさか、そのたった一週間後にその俊夫までも——ましてこんな尋常でない形で——奪われる運命だとは、思っても見なかった。

「また、次の犬を飼ってあげるから」

泣いて泣いて、ろくろく食事もとらぬ俊夫を氣にして、自分も目をまっかに泣きはらした有紀子が云ったが、

「たろうでなきややだい！」

俊夫は、そんななぐさめをうけつけるようすさえもみせなかった。

それまでは、何ひとついうところのない、平凡で、幸福なサラリーマンであつたにすぎなかったのに——正明は思った。

(まるで——まるで太郎の死が、いろいろなことをすべて招きよせたようだ。もしかしたら……太郎はわが家の守り神で、それが死んだために、何もかも悪運にかわってしまったのだらうか)

小学校二年になったばかりのひとりむすこを死なせるといふ、それだけでも、大変な悲劇である。

それなのに、いまや、正明と有紀子は、それだけですらなく、悪夢のような——一回として、そんなたぐいのことがらが、自分の身にふりかかろうとは考えてもみなかった、

そんなおぞましいドラマの主人公にされてしまっているのだった。

刑事、尋問、アリバイ、動機——

TVドラマか推理小説の中だけにあると思っていた、そんなことが、いまや、子供の四十九日さえすましていないこの夫婦をとりまいている。

世間の取沙汰、不愉快な、というより考えられぬような無神経なうわさ、うしろ指——たとえ、れっきとした被害者の側であつてさえ、《殺人》などということばは、ふつうの、平凡な、まっとうな人間には決して縁のないはずのことばであり、そうであるから、《子供を殺された》などということばは、それだけで、すでにかつての平凡な生活には正明たちが戻りえなくなっている、ということのあかしであつた。

(新聞、よみましたわよ)

(どの新聞にも出てたわね)

(かわいそうに、たった七つの子を、しめ殺すなんて……)

(どうぞ、あの、あまりお力落としなくね)

(でもまあお前も奥さんも、まだ若いし、それに健康なんだからさ)

面と向かつては、隣近所、会社の同僚、上司、友達、誰もが殺人者に怒り、あつく同情を表明したが、しかし、俊

夫の小さな遺体が警察からかえされてきた通夜の晩、台所に入ってゆくと、有紀子がべたりと床にすわりこみ、青い顔で耳をおさえていた。

「ねえ、七つの子を、ひとりつきりで留守番させる方も非常識ですよ」

「あら、でも、もとからの奥さん、出好きだから、ときどき……」

「派手だから目をつけられるんじゃない？」

「強盗じゃないかなんていつてたけど、でも、いくら強盗に入ったらそこを見つかっても、そんな子ども殺すかしらね」

「何か——あるんじゃない？」

「何かって？」

「あら、いやだ」

通夜の手伝いにきていた近所の女たちが、客がかえって、台所を提供してくれた隣の家の片付けにあつまり、ぶえんりよな声でしゃべっているのだった。隣家とは、台所と台所が窓ひとつでとなりあっている。声は、つつぬけだった。

正明の顔色が変わり、となりへ台所口からとびこんでゆこうとするのを、青ざめた有紀子が必死にとめた。ようやく、正明も思いとどまったが、しかしそれきり、そろそろ一週間をすぎるのに、有紀子は外へ出ようとしなない。

（世間の人は、なんと心ないのだらう）

かれらは、新聞に出たり、子どもを殺されたり、これほど皆とちがってしまったあいてには、何をしてもいいと思っているかのようだ。

事件をおもしろおかしく報道するTVのショー番組からも、取材の申し入れがあった。正明がとなりつけてことわった。TVをみるのも、うとましくなった。どのみち、TVをつける気にもなれなかった。CMや、歌番組や、アニメの画面をみると、その前にすわって夢中で指をくわえている俊夫が思いうかんだ。七つになってもまだ、俊夫は、しゃぶりこそしなかったが指をくわえるくせがぬけなかった。

しかし、有紀子の方は、世間の心ないしうちにもまして、葬式の日、俊夫のクラスの生徒全員が、先生につれられて来たことの方がこたえたらしい。

「もう、二度と、あの小学校の制服をきた子どもなんて見たくないわ」

有紀子はそう云った。

この作文も、有紀子の気持がすっかりおちついて、見たいと云いだせるようになるまで、他の遺品といっしょにかくしておこう——正明は思った。俊夫が、他のことにもまして、死んだ犬のことを書いているこの作文は、有紀子の胸をえぐるだらう。俊夫の事件があったとき、しゅうとも云ったし、彼も云ったことは、太郎が生きていれば、とい

う、詮ない愚痴であった。

庭につながれていた太郎は、小さなセバードくらいもある大きな、精悍な犬であったから、それを見ただけで、ふつうの強盗、泥棒や変質者などは、この家へは決して入ろうとはせぬだろう。飼うことをゆるしたのも、用心を考えただったし、それにまた、俊夫が作文に書いたとおり、太郎は実によく吠える、かしこい犬だった。家のもの以外には、決してなつかないし、それにその吠え声は、びいんと腹にひびいて、頼もしかった。

正明の一家の住んでいるこのあたりは、新興の分譲住宅地で、夜になるとしんとさびれてしまう。それに、その分譲住宅のすぐうら手の方には、古いアパートがいくつもたっていて、えたいの知れぬ住人もけっこういる。あまり用心のいいところとはいえなかったし、こしてきて間もないので隣近所ともさほど親しくない。

太郎の死んだあと、いずれまた新しい犬をさがした方がよいだろうと、すでに同僚に頼んでもあったのに、とうとう間にあわなかった。

「犬ね——犬がいればよかったですねえ。このあたりには、こう言う又何ですが、けっこう変質者リストにのってるようなやつがいましてね……なるべく、犬をかったり、戸じまりに気をつけることを、奨励していたんですが——」

巡査に気の毒そうに云われたが、何を今さら、と反発す

る気力さえ、わいて来なかった。

（太郎さえいれば、俊夫は死なずにすんだかもしれない）
なぜ、肝心かなめのときに役に立ってはいけなかったのだ——そう考えて、正明は、ふと、その太郎が死んだときのことを思い出した。

（そういえば……）

ふっと、奇妙な気がした。

太郎は、車にはねられて死んだ。別に、珍しいことでもない。家の裏手のほんの少しいったところは、夜でもトラックがびゅんびゅんと走っている国道であるし、それに犬が車にはねられても、目のまえで見えていたものでもないのかぎり、あいてはわからない。警察がさがしてくるわけでもないし、それに少なくとも、飼い主の気持は別としてそれが犯罪とはいまの日本では呼ばれておらぬこともたしかだ。

誰かわからぬひき逃げ犯人を、正明も俊夫もふかく恨みはしたが、正明がおかしいと思ったのは、そのことではなかった。

太郎はかなり大きな犬なので、隣近所の迷惑にならぬよう、しっかりとした鎖で昼夜をとわずつないである。分譲住宅の庭は、大きな犬が自由にかけまわるほど広くないし、といって家の中にあげるにも大きすぎる。

俊夫の作文にあるとおり、平日は有紀子が一日一回、俊